

京都大学	博士(人間健康科学)	氏名	金山三恵子
論文題目	Longitudinal burnout-collaboration patterns in Japanese medical care workers at special needs schools: a latent class growth analysis (日本の特別支援学校の医療的ケア従事者におけるバーンアウトと協働の推移パターンの解明—縦断データを用いた潜在クラス成長分析—)		
(論文内容の要旨) 【研究背景と目的】 重度の障がいをもつ子どもを必要とするこどもの支援を行う特別支援学校では、一般教師(教科を教える教員)、看護師、養護教諭が協働して業務にあたっている。そこでは、一般教師が医療的ケアに対して精神的な負担から休職に至る事例や、医療現場と教育現場の医療に関する認識の違いに戸惑いを感じて離職する看護師の事例が報告されるなど、専門性の異なる職種間の協働の困難さとバーンアウトの関連が指摘されている。特別支援学校では、こういった状況を改善するために、一般教師、看護師、養護教諭らのよりよい協働関係が重要であり、その実現を個人の資質や能力に委ねるのではなく、学校環境の整備や医療的ケアのシステムとして確立することが不可欠である。医療的ケア従事者の協働を促進しバーンアウトを予防するための効果的な取り組みが望まれている。 本研究では、協働を促進しバーンアウトを予防するために、①バーンアウトの程度の時間的推移が質的に異なるタイプを見いだす、②臨床的に介入が必要となるタイプを識別する、③バーンアウトを予防する方法を提言する、④バーンアウトと協働の co-occurrence のメカニズムを検討することを目的とする。 【研究方法】 日本全国の医療的ケアを行っている特別支援学校(615校)の中で、調査を承諾した141校に在籍する医療的ケア従事者396名(一般教師:127名、看護師:145名、養護教諭:124名)を解析対象者とした。バーンアウトは日本版バーンアウト尺度(久保, 1998)、協働は医療的ケア従事者の協働達成感尺度(金山・岩井, 2014)を用いて測定した。1年間にわたり各学期ごとに3回(各学期の終了時)の縦断調査を行い、このデータに対して潜在クラス成長分析の手法を適用し、質的に異なる推移のタイプを見いだした。 【研究結果】 バーンアウトは、程度の違いだけでなく、時間的経過のパターンの違い(時間的な変化が殆どみられない安定したタイプと、時間的経過に伴い変化する不安定なタイプ)があることが分かった。本研究においては、バーンアウトの程度と時間的経過の違いによって、 Low-stable type(64.1%) 、 Moderate-unstable type(16.2%) 、 High-unstable type(15.2%) 、 High-decreasing type(4.5%) の4つのタイプが見いだされた。これらのタイプに対応する協働の成長曲線には、バーンアウトの程度が高ければ低く、低ければ高いという逆の関係がある一方、バーンアウトの変動が大きければ、協働の変動も大きいという関係が認められた。 【考察】 これまでの先行研究の多くは、横断的データに基づきバーンアウト得点が高いことのみをもって問題と捉えるものであったが、本研究の結果から、バーンアウトは経過を観察することが重要であることが示された。バーンアウトを予防する上で、臨床的に問題となるのは上述の4つのタイプのうち、 High-unstable type と考えられる。このタイプはバーンアウト得点が不安定であり、特に3学期におけるバーンアウト得点が高いことから、このタイプに属する者が、最終的に心身に疲弊したり、翌年度に医療的ケアチームから離脱したりする恐れが強いと推測される。医療的ケア従事者のバーンアウトを予防するだけでなく、児童・生徒が継続的で質の保障されたケアを受けるためにも、このタイプ			

への早期介入が必要であると考えられる。

High-unstable type を早期に発見するスクリーニングの方法として、現在 1 学期開始時に行っている職員の精神的健康度に関する評価を 1 学期終了時に行うことが有効であると考えられる。この点はすぐにも着手できるものであり効果が期待できる。

また、バーンアウトと協働の高低は、逆の関係ではあるが、時間差なく同時に推移していることが示された。このことから、①協働の成否がバーンアウトの原因とする従来から指摘されている因果関係だけではなく、バーンアウトが協働の成否の原因となっている可能性や、②協働とバーンアウトの背後に共通の要因が存在する可能性が示唆された。もし、両者に共通する要因が見いだせれば、より根本的な解決方法を提言できる可能性があると考えられる。

以上の結果から、バーンアウトは時間的経過に伴う推移を臨床的に評価する必要性があり、一時点においてバーンアウト傾向が高いことが、バーンアウトに至る可能性の高さを示すものではないことが明らかとなった。また、バーンアウトと協働は逆の関係にある推移を示すことから、協働の成否がバーンアウトの原因とするのではなく、バーンアウトが協働の成否の原因となっている可能性が示唆され、協働とバーンアウトの背後に共通の要因が存在する可能性を見いだした。

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、特別支援学校における協働を促進し、看護師、養護教諭等のバーンアウトを予防するために、①バーンアウトの程度の時間的推移が質的に異なるタイプを見いだす、②バーンアウトと協働の **co-occurrence** のメカニズムを検討すること等を目的としたものである。

日本全国の医療的ケアを行っている特別支援学校に在籍する医療的ケア従事者（一般教師、看護師、養護教諭）を解析対象者とし、1 年間各学期終了時に縦断調査を行い、このデータに対して潜在クラス成長分析の手法を適用し、質的に異なる推移のタイプを見いだした。

本研究では、バーンアウトの程度と時間的経過の違いによって、**Low-stable type**、**Moderate-unstable type**、**High-unstable type**、**High-decreasing type** の 4 つのタイプが見いだされた。これらのタイプに対応する協働の成長曲線には、バーンアウトの程度が高ければ低く、低ければ高いという逆の関係がある一方、バーンアウトの変動が大きければ、協働の変動も大きいという関係が認められた。

バーンアウトは時間的経過に伴う推移を臨床的に評価する必要性があり、一時点においてバーンアウト傾向が高いことが、バーンアウトに至る可能性の高さを示すものではないことが明らかとなった。また、バーンアウトと協働は逆の関係にある推移を示すことから、協働の成否がバーンアウトの原因とするのではなく、バーンアウトが協働の成否の原因となっている可能性が示唆され、協働とバーンアウトの背後に共通の要因が存在する可能性を見いだした。

以上の研究は特別支援学校に在籍する医療的ケア従事者のバーンアウトと協働の **co-occurrence** のメカニズムの解明に貢献し、特別支援学校に在籍する医療的ケア従事者のバーンアウトの予防に寄与するところが多い。

したがって、本論文は博士(人間健康科学)の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、平成 28 年 10 月 7 日実施の論文内容とそれに関連した諮問を受け、合格と認められたものである。